

大子町 佐原地区産業文化祭

1. 調査概要

2015年11月1日、茨城県大子町で行われた佐原地区産業文化祭に参加した。今年で第31回を迎えるこの文化祭は、当該地域における文化や産業の振興を目的とした催しである。当日は農作物の品評会や児童によるソーラン節の発表が行われ、地域の人々による出店も数多く並んだ。今回筆者は、地元のさはら小学校の児童らによる自家製野菜販売の取り組み「夢道場」のサポートを中心にこの行事に参加した。

2. さはら小学校「夢道場」について

大子町立さはら小学校では、児童が自ら野菜を栽培し販売する「夢道場」という体験学習を行っている。「さはらファミリー会社」の名のもと、四年生～六年生の上級生が中心的な社員として活動を継続する。会社には社長や生産部長、販売部長といった役職が存在し、それらの役職も児童らが担当している。耕起や収穫といった作業は皆で協力し合いながら、販売に向けて長期間の準備を行う。収穫した野菜は夏の「道の駅」や秋の「佐原地区産業文化祭」で実際に販売されることとなり、こうした場が一年間の取り組みの成果を見せる場でもある。そういった意味で、今回参加した佐原地区産業文化祭での出店は、児童らにとっても非常に大きな意味をもつ機会であったと考えられる。

3. 内容

11月1日、学生が小学校に到着すると、既に児童らが準備を行っていた。収穫した農作物の洗浄、選別、袋詰めに加え、作業場の掃除や片付けまで児童らが自ら動いていた。中心となって指示を出すのは、経験があったり役職についていたりする上級生であったが、その他の児童も積極的に自分にできる仕事を探し、きびきびと動いていた。会場に着くと、自分たちに割り当てられたスペースで販売の準備を進めた。看板を設置し、野菜を並べ、



図1 夢道場の看板

会計の用意をした。実際に販売が始まると、児童らは事前に与えられた役割に従って販売をサポートした。店の前での呼び込み、会計、商品の受け渡し、広報などである。筆者は主に広報担当の児童の手助

* 教育学類3年

けを行った。児童らは事前に準備した手書きのチラシを手に、会場全体を回って呼び込みを行った。自分から声をかけることを躊躇する児童が多かったが、何人かで一緒に声をかけるなど、彼らなりに工夫しながら宣伝を行う様子が見受けられた。

商品が減り、販売終了の時間が近づいてくると、販売方法に変化が見られるようになった。在庫の多い商品を積極的に宣伝したり、値下げをしたり、複数の商品をセットで売るなど、様々な工夫を凝らして完売を目指す様子が見られた。販売終了後も、勿論自分たちで会場を片付けた。社長の役職につく児童の挨拶には、達成感溢れる表情で聞き入る児童らの姿が見られた。

産業祭では上に述べたような児童による野菜販売の他にも、地域の人々による出店や各種イベントが開かれており、筆者は焼きそば、及びバザー販売等のサポートを行った。当日初めて顔を合わせたにもかかわらず、以前から知り合いであったかのように接していただき、学生もすぐに溶け込むことができた。地域の強いつながりと同時に、外部から来た人々への寛容さ、皆で行事をつくりあげてゆく力強さを感じた瞬間であった。



図2 産業文化祭のようす①



図3 産業文化祭のようす②

4. 考察

4-1. 児童の自主性

夢道場における特徴としてまず挙げられるのが、児童の自主性に重きが置かれているという点である。筆者が夢道場に関わったのは当日のみであったが、その短い時間の中でも、ここでは児童らが自ら思考し行動することが求められ、児童自身もそれを自然に受け止めて実行に移していることが伝わってきた。販売が開始されてから、一つ一つの具体的な行動の指示は役職につく上級生が担当し、周囲の大人はあくまでそのサポートを行うという姿勢が保たれていたのが印象的であった。

彼らは普段から生産部、広報部、販売部といったチームに別れ、野菜の栽培から販売に至るまで多くの段階に携わっている。今回はその集大成であり、児童らにとっても強い思い入れのある行事だろう。栽培した野菜を実際に販売することは、児童に達成感や責任感の芽生えを促す。そういった意味で、さら小学校の取り組みは非常に意義のあるものであると言えるだろう。またこの販売が、学校の中ではなく、学校外の一行事として行われるという点も重要であ

る。会場には夢道場による野菜販売スペースのほかにも、地域の人々による出店が数多く並んでいる。お客さんは決して野菜を購入するためだけに来ているのではない。そのなかで自分たちの商品をアピールし、人を呼び込まなければならない。児童自らによる積極的なはたらきかけ、創意工夫が自然と喚起される状況が用意されているのである。活動における様々なアイデアや工夫は、児童側から提案され発信されることが望ましい。そう考えた時、児童らがそういった自由な提案をもって活動を発展させていくための機会が今後も保証されることが求められるだろう。筆者は今回、児童をサポートする立場で参加させてもらったが、その立場からも、児童の活動の幅を広げるような手助けを目指すべきであると感じた。次回参加させていただく際には、今回の気づきを活かした関わり方を考えたい。

4-2. 異学年交流

夢道場の活動におけるもう一つの大きな特徴として挙げられるのが、異学年交流の場として機能しているという点である。「さはらファミリー会社」に所属するメンバーは四年生～六年生が中心であり、役職の有無等違いはあるものの、彼らは同じ会社の社員として活動し、その会社を支えている。通常の授業とは異なり、夢道場においては学年問わず皆が同じ目的を共有し、同じ活動を行う。そのなかで学年の壁を超えた交流が行われるのである。農作物の栽培においては、その過程において多くの問題や困難が発生しうる。そうした問題や困難そのものが、児童らの交流の深化につながるきっかけとして作用していると考えられる。今回は販売のみの参加だったため、それ以前の活動について児童間の交流がどのように行われているかについて実際に観察することはできなかったが、販売を行う児童らの様子からも、活発な交流が見てとれた。当日は社長をはじめとした上級生の指示を中心に、その時々状況に応じて児童同士が相談しながら各々の役割を果たしている姿が多く見られた。特に役職をもつ上級生については、下級生を含めた他の児童から声がかかることが多く、彼らはその都度、状況を確認しながら次の行動に関する指示を出していた。教師をはじめとした周囲の大人による助言を参考に交流が図られる場面もあったが、児童のみでの交流も各所で成り立っていた。そうした様子から、今回に至るまでの活動において、児童間でのコミュニケーションが継続的に行われ、信頼関係が築かれていることがうかがわれる。このように、さはら小学校における夢道場の活動においては、その特徴のひとつとしての異学年交流が、実際の活動において随所で機能していることが分かった。

4-3. 行事を通じた地域のつながり

産業文化祭全体に対して感じたのが、この行事が、地域の人々によるつながりを強める役割を果たしているということである。筆者が出店の手助けを行っている際に、大人に混ざって地域の子供たちが販売を手伝う姿が見られた。子供たちは周囲の大人の指示を仰ぎながら、出来上がった商品を包んだり、商品を店頭と並べたりと、積極的に働いていた。それは地域の大人

と子どもの交流の場であり、同時に、地域の担い手が受け継がれてゆく場でもあるように思われた。小さい頃は親に手をひかれ、純粹にその行事をお客さんとして楽しんでた子どもが、成長するにつれ手伝いという形で行事を回す側に関わるようになり、やがてその中心を担うようになる。それは単なる行事の継続に留まらず、地域そのものの継続に関わってくるだろう。

このように、地域に根付いた行事は、文化の発展や振興といった行事そのものの目的以外にも役割を果たしている。その行事が行われることによって自然と発生する人々の交流が、地域のつながりを強化し得るのである。今回、地域の行事をサポートする側として参加する機会を得て、地域の人々の交流を近くで感じることができたのは非常に大きな収穫であった。近年地域における人間関係の希薄化やコミュニティの弱まりといった問題が数多く指摘されているなかで、古くから地域に根付いている、いわゆる「恒例行事」に注目することは大きな意味があるのではないだろうか。地域の行事には規則や絶対的な拘束が存在せず、慣習として継続されるものも多いため、参加者の減少やそれに伴う行事の衰退等、直面する課題も少なくない。しかしながら、今回の佐原地区産業文化祭で見られるように、行事が元々の目的を超えて効果を発揮する可能性は十分にある。そうした視点を踏まえた上で実施することで、地域の行事はその地域にとって必要不可欠な文化として成り立ちうるのではないだろうか。この視点については、今回の参加によって初めて明らかになったひとつの小さな気づきとしての段階であるため、今後同様の活動に携わる機会を得た際、より深く考察したい。

5. 感想

今回初めてさはら小学校の夢道場という活動に参加し、児童らのサポート役としてその場に入ることによって、児童同士の交流や地域の人々との関わりについて第三者的視点から調査・観察することができた。また、児童の体験学習は勿論、地域における行事に関して考える契機となる貴重な機会であった。今回は事前の調査や目的意識に不十分さが残ったため、次回は準備段階から力を入れ、より深い理解と考察につながるよう努力したい。